



ICSは、学びとキャリアがリンクした専門職大学院
研究では、世界に通用する日本発のセオリーを目指す

異文化を知ることによって、 日本発のセオリーに挑む

日本国内にいると何ら違和感のないことが、外国からきた留学生の目には非常に奇異に映ることがあるようです。例えば、麦酒と健康飲料に同じ企業ブランドがプリントされている。アサヒ、キリン、サッポロ、サントリー…。麦酒と健康飲料で組織が分かれていたり、ロゴが微妙に異なったりしていたとしても、企業ブランド名が前面に出されていることには違いありません。しかし、合理的なブランディング理論を学んだ彼らは「健康ということを考えたとき、麦酒はあまりよいイメージを持っていない。麦酒で使われるブランドを健康飲料に使うのはマイナスになる」と言います。一方、現実問題として同じブランドが麦酒と健康飲料の両方を支援しているのは、そのブランドのもつ好ましいイメージが麦酒というカテゴリにとらわれないコンテキストとなって健康飲料ともうまく結びついたからです。企業が顧客と共有するに至ったコンテキストは日本市場の中で時間をかけて作り上げられたものであり、それが「暗黙の了解」として機能するので、外国からきたばかりの留学生には分からないというわけです。実は日本という国は、外部者にもすぐ分かる単純明快なロジックでは理解し難い暗黙の了解に満ちた、「ハイ・コンテキスト文化」の典型として知られています。一方で、暗黙の了解が少なく、明快なロジックで説明が付きやすい「ロー・コンテキスト文化」の典型は米国です。

経済原理に加えて、人々の心理や国の文化的な特徴も市場に少なからぬ影響を与えます。マーケティング理論は米国で生まれたものですから、米国の文化と人々の心理を反映しています。もちろんその多くは一般化できるものであり日本市場においても充分適用されていますが、ハイ・コンテキスト文化である日本には特徴豊かでユニークな現象が多々存在するはず。消費市場としてある意味で米国以上に洗練された日本には、世界をリードするような先進的な消費現象が起こっていても不思議はありません。それを見抜いて理論化し、世界に通用する日本発のマーケティング理論を世に問うべき時期にきていると思います。

自国文化の特徴は、異文化を知ることによってはじめて鮮明に見えてきます。皇居を望む神田一ツ橋で、世界中から集まった学生たちが英語で学ぶICSは、まさに異文化に触れながら日本の特徴を考えるに適した場所です。もちろんこれは、マーケティングに限った話ではありません。品質管理や生産、知識経営といった分野では、日本発の理論がすでに世界で認められています。異文化を知ることによって日本発のセオリーに挑むことは、ICSの大切な使命であると考えています。

企業との意義あるギブ&テイクで、 知識を実践に活かせるように内面化する

大学学部が若干の専門性と深い教養を身につけることを主眼とした「人間形成の場」とすれば、ICSのような専門大学院は成熟した精神を前提に専門性を磨き、より高いポジションへとキャリア・アップできる能力を培う場であると思います。ICSではこうした観点から、専門大学院としての環境整備に力を注いでいます。例えば、キャリア・プレイズメントの専門家を責任者として、学生の就職活動の支援を強化しています。また、2年目の秋に実施されるインターンシップにも力を入れており、MBAコースの仕上げ期にふさわしい充実した経験ができるよう、企業への働きかけをはじめとする積極的なサポートを教授陣が行っています。ICSの学生は全員が社会人経験者であり、大学院では自らの経験を知識として体系化するフレームを身につけたいうえで、さらに高度で実践的な知識を学んでいます。その彼らが、無償ながら高いコミットでお手伝いするわけですから、受け入れ先の企業にとっても大きなメリットがあることだと思います。ICSでは、お互いに意義あるギブ&テイクが実現できるインターンシップをもっと充実させたいと考えています。

伝統的ゼミを通して、 学びとキャリアをリンクさせる

一橋大学発祥の地でスタートしたICSには、本学のよき伝統を引き継いでいることが少なくありません。少人数のゼミ制度はそのよい例です。ICSのゼミは、ここで学んできたことをキャリアに活かすためにどうするかを考え、知識と経験を集大成し、将来のビジョンを形成する場としての役割を担っています。現在私のゼミでは、メーカー出身が2名、運輸出身が1名、流通出身が1名という構成で、3人がブランド・マネジメントを、1人が起業論をテーマに学んでいます。テーマは学生が自分で選択したもので、自己のキャリアに直結するものです。本学の伝統的ゼミの精神を活かし、彼らもつ専門性に社会科学の根底にある「モノの考え方」を補完しつつ、研究調査レポートやビジネスプランを練りあげていきます。

学んだことを将来のキャリアによりよく活かしていくためには、「こういう会社のこういうポジションで働きたい」という自分なりのキャリア・ビジョンを早い段階から主体的に考えていくことが重要です。英語による専門的な授業はしばらく厳しいかも知れませんが、努力を続ければ必ずモノになります。その経験は卒業後、グローバルなビジネスの場でリーダーシップを発揮するうえで大きな自信に繋がりますから、将来のキャリア・ビジョンも、自信を持ってぜひ高く設定して欲しいと願っています。ICSにおいても、学生はゼミでのきめ細かい指導を通して主体性と自信を育んでいるのだと思います。(談)

